

令和3年度第1回ピースツーリズム推進懇談会 会議要旨

1 開催日時

令和3年9月29日(水) 14時00分から16時10分

2 開催方法

オンライン形式

3 出席者

懇談会構成員

団体名・役職	氏名
被爆体験証言者(平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事)	原田 浩【座長】
広島県原爆被害者団体協議会 事務局長	前田 耕一郎
広島市立大学広島平和研究所 所長	大芝 亮
広島大学平和センター 准教授	ファンデルドゥース 瑠璃
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima 理事長	渡部 朋子
一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局 事務局長	高田 義治
一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会 会長	古谷 章子
広島市市民局国際平和推進部 部長	村上 慎一郎
広島市経済観光局観光政策部 部長	末政 直美

(計9名、欠席1名)

事務局

広島市経済観光局観光政策部 観光プロモーション担当課長、課長補佐、主事 (計3名)

4 議題

- 1 令和3年度の取組
- 2 インターネット調査の実施報告
- 3 意見交換

5 公開・非公開の別

公開

6 傍聴人の人数

0名

7 会議資料名

資料 ピースツーリズム推進懇談会(令和3年度第1回)

8 発言の要旨

【1 令和3年度を取組、2 インターネット調査実施報告】

(原田座長)

事務局と瑠璃委員、ありがとうございます。今、ご報告いただいた内容を踏まえて、皆さんの忌憚のないご意見をお伺いしたい。

(高田委員)

調査の際に、「ピースツーリズムを知っているか」ということを聞いているが、そのピースツーリズムという言葉に対する理解について確認したい。「ピースツーリズム」という言葉、私も知らなかったぐらいの言葉だが、全国の皆さんに本当に知られているツーリズムなのか。それとも、平和学習ツアー、ピースツアーという言葉の理解で皆さんアンケートに答えられているのか。回答者がどう言葉を理解し、回答しているのかお伺いしたい。

(瑠璃委員)

本全国 2000 人調査報告、「令和3年度ピースツーリズムに関する潜在来訪者の意識調査結果分析と提案」は、広島市経済観光局観光政策部 観光プロモーション担当課との共同調査で、日本学術振興会助成事業の一環である。調査に当たり、まず、質問票（参考資料4）の冒頭に、ピースツーリズムについての説明を入れた。そのため、この説明と自分の理解が違うと感じた方が「知らなかった」と回答していると理解している。

(高田委員)

なるほど。全国的に、エコツーリズムやアドベンチャーツーリズム、古民家ツーリズムなど、何でもツーリズムをつけて浸透させていくという動きがあるが、ピースツーリズムという言葉が浸透させる動きも必要だと思う。例えば全国で出版されている旅行雑誌に掲載するなど、全国で周知するきっかけ作りが必要なのではないか。キーワードとして、「もう一度」という言葉が出ており面白いと感じたが、「もう一度広島 ピースツーリズム」というようなサブタイトルで、人気旅行雑誌の別冊などが出来れば、修学旅行含め色々な方に見ていただけるのではないかと。これだけの素材があるので、それを整理して、組み合わせ、交通アクセスやグルメなども全部入れた雑誌の特集などが組めると良いと思う。

(瑠璃委員)

そういった広報が必要だと思う。行きやすさというか、他の人も行っている、行けばこんなことができるという情報を全国区の雑誌などで企画してもらえれば、ピースツーリズム自体のネームバリューが高まると思う。以前、国際的なサイトであるトリップアドバイザーのロコミをデータとした研究成果を、広島平和記念資料館にもご尽力いただき、「平和」と「観光」のイベントやホームページで発表したところ、あっという間に関連サイトのアクセス数が高まった。まず、何かの形で皆さんが見ているものに、情報を載せるということが大切なのではないか。是非、全国区の雑誌やガイドブックなどにどんどん発信したら良いのではないかと。思う。

(事務局)

事務局から、調査でピースツーリズムについて、どのように説明しているかを補足する。瑠璃委員の

説明のとおり、ピースツーリズムについては、質問票（参考資料4）の最初に説明を入れており、また、問9でも「ピースツーリズムでは、広島を訪れた方に平和とは何かを考えたり、平和への思いに触れてもらう機会を提供しています。市内の主要な平和関連施設などのスポット情報に加え…」とより詳しく説明していたが、ピースツーリズムの認知度についての集計結果として、参考資料5のスライド11で、72.5%の方が「ピースツーリズムをまったく知らない」と答えており、認知度の問題は大きいと感じている。

（大芝委員）

瑠璃委員、ありがとうございます。調査のアンケートの結果から、これだけ読み取れることに本当に興味している。「じっくり」「ゆっくり」そして「もう一度」という簡潔なキーワードにまとめられていて、分かり易かった。また、「ピースツーリズム」という言葉の認知度についてだが、もう少し一般的なものは「ダークツーリズム」という言葉である。私も大学の学部1年生の授業で、ピースツーリズムについて紹介したところ、やはり「ピースツーリズム」という言葉は聞いたことがないという者が多く、「ダークツーリズム」であれば、なんとなくわかるという回答が多かった。広島市のピースツーリズムには、過去の話だけではなく現在に繋がっている、現代から過去を見るという非常に深い意味がこの言葉に込められていると理解している。良い言葉、良い概念だなと思っているので、是非実態も伴って進めていけば、政策的にも、そして学術的にも良いコンセプトになると思う。

主に二つの層、深堀したい層と浮遊層に分けられるということについてコメントする。浮遊層にシニアがいる場合、シニアの中にはお金を持っている層もいるのでその層と重なると思った。また罪悪感については、「観光で平和を学んでよい」と私は聞いて安心した。こういう風に言ってもらえると、次の提案も安心してすることができる。深堀したい層については、前日も申し上げたが、特に若い人であれば、「この世界の片隅で」が典型だと思うが、映画やアニメーションの聖地巡礼的なルートを作れば、ルートを巡る方も当事者意識をもって、主人公の気持ちになって広島を見て回ると思う。一方、浮遊層の中で、こういうことを見ると気持ちが沈んでしまう、あるいは罪悪感を持ってしまう方々に対しては、まず広島に観光の面から来てもらい、それが自ずとピースツーリズムの話に結び付くとなればよいと思う。カープなどは、その典型だと思う。今でこそ、カープはこんなに強くなったが、巨人とは違って非常に悲惨な時代があり、それは単にお金がなかっただけでなく、やはり被爆というところから始まっている。カープの歴史を使うというのは、カープファンだけでなくプロ野球ファンにとっては、すごく面白いことで、「ここに来ればカープの歴史を知ることができる」というツアーを作ってほしい。一日中、カープの歴史を巡り、ツアーの最後には観戦チケットもつけて、そのツアーに参加するとカープが観れるというところまで持って行ってほしい。また、カープだけでなく、私自身は高校野球のファンで、広島は名門校が沢山ある。広島に3年前に来たが、赴任が決まった時とても嬉しかった。そして、初めて崇徳高校を見た時には、感動した。広島には、崇徳高校、広陵高校、広島商業、新庄高校などといった高校野球の強い学校が沢山あるので、是非野球の県大会などと連携して、ツアーを作ってほしい。参加したくない層に対しては、そういうものと結び付けて楽しんでもらいたい。

先ほどピースツーリズムの認知度の問題が話題に出たが、認知度の高いものをピースツーリズムに組み込むということが必要ではないか。例えばアンデルセン、東京の人は東京のものだと思っているが、私自身、広島に来て初めて広島のものだと知った。アンデルセンの本店は被爆建物であり、アンデルセンのストーリーと結び付けるとよいと思う。他には、ユーハイムのバームクーヘンも広島から始まったものである。歴史をたどってみると、戦前、広島は軍都だったので、似島に捕虜収容所があった。そこ

にカール・ユーハイム、ユーハイムの創設者が捕虜としていた。あの時代から始まって、現在に至る話が、スイツの話を見ても出てくる。アンデルセンやユーハイムは、現在、スイツの中でも大御所であり、是非これらと組んで取り組んでもらいたい。お好み焼、オタフクソースの工場見学なども入ってくると、深く学ぶことが出来るのではないか。他には、路面電車は、素晴らしいと思う。広島の子どもはそれが当然として見ているが、広島以外の地域の子どもたちにとっては、路面電車自体が珍しく、かつて京都で走っていたものや、海外で走っていた路面電車などとても興味を引くと思う。そこから、路面電車が被爆後に、いつから走り出したかなどの歴史にもつながる。また、電車内では、カーブとサンフレッチェの選手が車内アナウンスをしている。このようなサービスも、私のようなよそ者からすると、素晴らしいと思う。素晴らしいサービスが行き届いているのだから、そこにもう少し説明を加えるだけで、被爆に関わる話も自然と入っていくのではないかと思う。また、広島出身の歌手も多い。古いかもしれないが、吉田拓郎、矢沢永吉、オノ・ヨーコなど広島にゆかりのある有名人は多い。これらのシンガーが、どこの喫茶店に行っていたか、どこのバーで飲んでいたかなどを巡るような本もあるので、そのようなコンテンツが欲しいと思う。一つのテーマについて、一泊二日くらいかけて、じっくり、ゆっくり見てもらいたい。

その他、瑠璃委員がおっしゃっていた、自発的参加型の取組についてもコメントしたい。YouTube や市立大学で行っている1分動画をみても、若い人は自分自身で発信したり、作ったりするのは得意である。1分動画の学生の感想を聞くと、このような参加ができる取組があると嬉しいと言っていた。

(古谷委員)

調査を行った、株式会社サーベイリサーチセンターという会社は、どのような業者なのか伺いたい。2,079人からの回答があったとあるが、集計等はどのように行ったのか。

(瑠璃委員)

2つの質問をいただいた。一つ目は、調査を実施した業者がどのような会社であるか、これについては観光政策部の方で選出されたので、説明いただきたい。二つ目は、集計をどのように行ったかということだが、データは業者が取りまとめ、統計処理と定量・定性分析は、広大平和センターのファンデルドゥースが実施した。

(事務局)

株式会社サーベイリサーチセンターは、市場調査を行っている調査会社である。業者の選定方法は、見積合わせにより行った。今回は、ピースツーリズムのマーケティング調査として、2,000名の方から回答を得る調査を企画し、そのデータ収集を同業者に依頼した。

(前田委員)

調査の報告、ありがとうございます。まとめていただいた結果分析と提案の中で、非常に興味があることがあったので、提案したい。とうろう流しを実際にやってみたいという方が、圧倒的に多かったという点から、現在8月6日に実施しているとうろう流しを、年中通して実施してはどうか。元安橋のもとなどで年間を通して受け付け、とうろうを流した後には写真などで報告出来るとういと思う。

(瑠璃委員)

森重明さんの「ペーパーランタン」という映画の中で、とうろう流しをするシーンがあるので、それを見た外国人の方から、「自分も資料館に行き学び、とうろうを流したい」と言われたことがある。また、多くの学生からも「自分たちも流したい」という声を聞いたことがあるので、今、ご提案があった取組が実施されたら素晴らしいと思う。

(村上委員)

詳細な調査、本当にありがとうございました。今後この調査結果をどのように施策に展開していくかが大事だと思うが、国際平和推進部の立場から一つ考えたことを共有したい。深堀したい層と浮遊層の二つの層があるということであった。我々が、今、危惧しているのは、平和に対する意識が薄れている、核兵器や核廃絶の問題に対しても風化してしまうのではないかということである。まずは、出来るだけ多くの方に関心を持ってもらえるような取組をやらなくてはいけないと考えている。おそらく広島に来る人というのは、多少なりとも平和に関心があるので、ピースツーリズムがきっかけとなって、平和意識の醸成に繋がるような取組が出来たらよいのではないかと思う。深堀出来るコンテンツももちろん重要ではあるが、裾野を広げ、核廃絶への機運に繋げていくという意味で、浮遊層にアプローチしていく取組がより重要なのではないかと思う。

(渡部委員)

素晴らしい分析をありがとうございました。私としても実感を伴って分かる所があった。それを少し説明したい。コア層（深堀したい層）が若年層であり、リピーターであること、これは、実感としてある。10代、20代だけではなく、30代、40代の方々が興味を持っている。40代の方々は子どもを連れてくることが多い。今年、このコロナの中でも何組か来てくれたが、この方々は「必ず、また来る」と言って帰っていく。帰った後、自分の地域でもう一度広島を伝えたり、地元の学生を連れてくると言ってくれる。20代の学生も沢山来てくれており、その方々へのコンテンツの提供というのは、非常に大事だと思う。

キーワードの中にある「罪悪感」について、一つエピソードを紹介したい。今年、若い女子学生がANT Hiroshima に来て、「ものすごい罪悪感がある」と真摯に問いかけてくれた。彼女は、「小さい頃から、平和教育を受けてきて、広島川を見ると亡くなった人の姿が見えるぐらい、ものすごく強く申し訳なさを感じている。このままだと、この街を嫌いになってしまう」と語った。私は、「伴走するから、もう一度、今のあなたの目線で、広島を巡って、じっくり、ゆっくり、調べて。広島街を訪ね歩いて、巡ってね」と伝えた。そうしたら、数日後に、目を輝かせて帰ってきた。何があったのかというと、東京大学の渡邊先生たちの、戦前の広島街の様子などの写真に色をつけている写真や、当時の動画を見て、「こんなに幸せに生きていた人たちがいた」ということに出会い、自分の気持ちが変わったと言っていた。そして、「旧中島町の再現を、自分の手でやってみたい」と言って、彼女は今、実際に取組んでいるところである。

もう一つ紹介したい。被爆体験というと、8月6日の体験だけを広島では言われる方が多いが、私は、戦前から繋がる一人の生涯を通して語ること、8月6日の被爆者のその後の生き方すべてが被爆体験だと思っているので、それを被爆者の方に語ってもらっている。その話を直接聞いた、東京の学生たちが、実際にリピーターになっている。「継ぐ展」というのを、広島出身の方がやられているが、東京の学生たちのように安宿に泊まって、広島が絵本でどのように伝えられているかなどを研究している方もいる。瑠璃委員の調査結果は、私が日々、肌間隔で感じていることと一致している。これらのコア層は、自分

で発信していく方々であり、若年層への影響力も大きいので、彼らを大事に育てていくということが、重要である。「もう一度広島」というキーワードは素晴らしいと思う、まさに、その「もう一度広島」というところに、深掘出来るコンテンツをどれだけ提供できるかだと思う。

深掘したい層へのアプローチに加えて、大芝委員がおっしゃっていたような浮遊層へのアプローチが重要である。「楽しんでよいのか」とおっしゃる方も多いが、広島に住んでいる私たちが、「まあ、ええじゃないか。お好み焼食べましょうや」「ちょっとお茶しましょうや」「こんな素敵な場所もあるんですよ」と声掛けをすることが必要だと思う。人生を楽しむことも大事で、それを力に変えてこられた方々もいらっしゃる。中沢啓治さんに伺ったことだが、「本当に意気消沈した時には歌を歌ってきた」、と言っていた。歌を歌って鼓舞して、笑いぬいてきた。来訪者の方にも楽しんでもらうことで、気持ちももっとほぐれて、もっと知ろうと思い、もっと広島に心を寄せてくださるのではないかと。是非、「もう一度広島」というキーワードで、じっくり、ゆっくり、広島を歩き、味わうということをしてもらいたい。

(末政委員)

瑠璃委員、本当にありがとうございました。平成 29 年度にピースツーリズムが始まって、まずモデルルートを作り、その次のステップとして色々模索する中で、非常に深い考察を委員のご協力の下で出来たことを、誠に有り難く思う。他の分野を含め、こんなに深く考えさせていただける機会を頂けるといことは、なかなかないので、しっかり受け止め、活かしていきたい。

各委員の皆さんのご意見の中でもあったが、コア層は若い方が多く、これからの平和を考えていく上で大事にしていきたいと考えている。この層への取組、企画、プロモーション、受入も含めて考えていきたいと思っている。また、人数が多い浮遊層は、可能性があるもののどうやって関心を掴めばよいか分からず、私たちも苦勞しているところである。罪悪感の話に繋がるが、広島市に来て、平和記念公園、原爆ドーム、広島平和記念資料館を訪問すると心が重く、しんどくなるという話はよく聞く。人間であるがゆえに心が重くなると、風光明媚な宮島などに行きたくなくなり、そのまま戻ってこない方も多い。大芝委員がおっしゃったように、広島市にも楽しいことや美味しいものがあるので、いかにうまく繋げていけるかが重要である。広島市の中でも、被爆建物や樹木などだけでなく、被爆から立ち上がってきたものも含め、バラバラになっているものをいかに繋いでいくか、考えなくてはいけない。委員の皆さまからご意見を頂きながら、広島市の中で財産のある所を結び付けて、来訪者の方が長く滞在したくなるような取組を考えていきたいと思う。本当にありがとうございました。

【3 意見交換】

(古谷委員)

1945 年 8 月 6 日の人類初めての原爆投下で多くの犠牲を払って、街が壊滅したという悲惨な体験があるがゆえに、1945 年以前の広島についての歴史が語られる機会が非常に少なくなっていると感じている。しかし、432 年前に毛利輝元が築いた広島城をはじめ、城下町として栄え、明治時代には臨時の首都であり、その後は軍都として発展を遂げてきた。大きな時代の流れの中で、人々の営みを広島出身やゆかりの偉人のエピソードを整えて、後世に語り継いで、後世に生きる人たちが自分の生まれ育った風土への愛着と誇りをもって継承してもらいたいという思いがとて強くなってきた。核廃絶も大事だが、生きてきた人の生の声やストーリーを知ることが大事ではないかと思うようになった。その近代史の中で、明治時代から移民が国策として推奨されて、多くの人たちがハワイ、北米、南米に希望をもって海を渡った。実際に現地を訪くと、政府の説明とは違うことが多々あって、言葉も通じないなど苦

難の道を歩んだ。そのような中でも、苦勞して広島に留守家族に仕送りをし、また、新天地では森林の開拓など移住先の国にも大きく貢献した。日本から海外へ移住した移民の約40%が広島県人であったが、広島県人の苦難とフロンティア精神を後世に語り継いでいくということは、原爆で壊滅的な被害を受けながら、困難を凌いで、街の復興に力をつくした人間のレジリエンスを伝えることと同じくらい大事だと思う。具体的には、旧陸軍被服支廠の建物の4棟の内1棟を、広島移民ミュージアムという形で使ってもらえないだろうか。日系の方を案内する際に、「自分のルーツが広島にあってそれを探りたい」という声はよくある。例えば、そのような移民ミュージアムで、訪ねてきた人のルーツに関わる情報を探して、伝えるということが出来たらよいと思う。そうすれば、日系移民にゆかりのある人々が広島を訪れる大きな動機づけになると思う。

もう一つ。数年前まで、広島と海外の若者との交流プログラムがよく取り上げられていたと思うが、コロナの影響を受けている。そういう取組が非常に大事だと思っており、今年3月の会議でも述べたかもしれないが、ヒロミ・ピーターソンさんという、広島女学院を卒業され、米国ハワイのプナホウ・スクールという高校で、日本語教師を続けた方がいる。その方が、禎子と千羽鶴の本を日本語の教科書として出版され、日本語学習者の中で好評で、世界中で使われている。その印税を利用して、広島とハワイの学生が交流するプログラムを10年以上実施してきた。退職され、今度は、ハワイの私立校と公立校から選んだ学生1名ずつを広島に送りたいと考えている。ただ物見遊山のために送るのではなく、学生たちは広島に来る前に、自分の家族または知人の中で戦争体験を持っている方にインタビューし、自分の考えをまとめた上で広島に来る。そして、広島で、同年代の高校生とディスカッションをしたり、広島平和記念資料館を訪れたり、被爆者の話を聞いたりして、自分の考えがどのように変わったかをまとめ、ハワイの学生たちに、それを体験として伝えるというプログラムを計画している。ハワイの日米協会の協力も得ており、広島からも学生を2名送ってほしいと言われている。その日本の窓口を私はしているのだが、2023年に実現出来るよう計画している。ピースツーリズムのように、海外から広島に来た来訪者に被爆の実相を伝えることも重要であるが、若い人が広島に来て、自分事として核の恐ろしさを体験して、国に帰って自分の言葉で伝えてもらうことを支援することも、ピースツーリズムのミッションではないかと思う。

(村上委員)

先ほど申し上げたとおり、浮遊層をどのように取り込み、リピーターとして深堀したい層に繋げていくかという取組になるかと思うが、今年度から平和文化の推進に取り組んでいる。平和意識の醸成のため、11月を平和文化月間と定め、平和を切り口とした様々な文化イベントと連携し、PRしていこうと始めた。現在、イベントカレンダーとして、A4判の三つ折りのパンフレットを作成中である。「P×C」という共通のロゴを使用し、関連イベントとして、平和をテーマとした様々なイベントを紹介している。11月1日に開催するオープニングイベント、平和文化講演会では市長が挨拶する予定である。関連イベントの中には、渡部委員にご協力頂いているイベントやピースツーリズムのイベントなども入っている。この取組は、来年度以降も続け、取組の輪をどんどん広げていきたいと考えている。市長からは、広島市内の取組だけではなく、広島広域都市圏の各市町にも呼び掛けるよう指示があった。既存のイベントでも、新規のイベントでもよいが、平和を切り口とした文化イベントを開催することで、市民の皆さんに平和の尊さを改めて感じていただきたいと思いますと考えている。ロゴと合わせて、イベントに賛同することを示す「黄緑色のリボン」を皆さんにつけて頂いて、盛り上げていこうと考えている。広島には沢山のコンテンツがあるので、平和を考えるきっかけとして、入り易いところから入っていただいて、核兵器の

問題や平和の問題に関しても深めていただくような取組が大事なのかなと思う。今までこのような取組がなかったこともあり、我々としては、今後そういった取組を強化していきたいと考えている。

(前田委員)

これまでピースツーリズムでは、モデルルートを設定したり、ルートマップを作ったり、ルートに関して、力を入れてこられたように思う。ここでは、ピースツーリズムの概念について申し上げたい。ピースツーリズムは、平和ということである。平和ということに関して、広島は被爆都市であり、原爆を受けた都市である。そのため、原爆がないということが平和だということがメインになってくる。ただ、平和に関しては、飢えがないこと、差別がないこと、貧困がないことなど、様々な概念があるわけだから、もう少し概念を広げて捉えてみたらどうなのかなと思う。大芝委員がおっしゃっていたように、例えば食べることや一般的な観光という側面に広げてみればよいのではないかな。

もう一つ、これまでルートに着目してきたが、面的な広がりを考えてみてはどうだろうか。モデルルートだと行き方を示すだけなので、来訪者が「〇〇に関心があるからここに行きたい」、「〇〇分野の〇〇を見てみたい」という時に、ルートだけだと選びにくいのではないかなと思う。例えば、「被爆したもの」「エリア」など分野ごとに分けて、その中から選ぶように出来ないだろうか。エリアについて、末政委員は広島市内を強調されていたように思うが、市長は周辺都市との連携ということもおっしゃっているようなので、広島市内だけでなく、他の都市と連携してはどうか。広島は、都市でありながら、海や山などの自然も豊かであると昔からよく言われている。海ならば、例えば江田島。江田島には、海上自衛隊の術科学校の教育参考館があり、また、海での体験アクティビティなども沢山ある。山であれば、芸北と言われる北広島町などには、自然がたくさんあり、それを大事にしている。北広島町や三段峡との連携なども考えられるのではないかな。

平和と自然に関して、平和文化センターの元理事長であるスティーブン・リーパー氏が、平和文化村という活動を行っているが、彼も広島に来た人を案内する際に、狭義の意味での平和だけではなく、自然であるとか、体験するということに関心を持っており、ツアーの中に農村の体験だったり、山間部の観光を取り入れるということをしている。

私は被団協の人間だから、平和ということ正面から言わなければならない立場である。ただ、原爆や核兵器のないということばかりに絞ってしまうと、先ほどのインターネット調査の質問 10 や質問 11 の結果のように、それに拒否感を示す方々が出てくる。そのため、もう少し幅広に考えてみてもよいのではないかなと思う。

具体的に進めていくには、域外から来る人や、市域エリアで平和関係に携わっているピースボランティアなどガイドをしている人に対して、広島市だけではなく周辺の観光と、(狭義の意味での) 平和に関わることを組み合わせたようなモニターツアーという形で、広く知る機会を提供してはどうだろうか。

(高田委員)

ピースツーリズムの概念、すごく難しい課題である。やはりピースツーリズムでは、広島が原爆投下からこれだけ復興した歴史を伝承していくということが重要であると考えている。そのため、平凡な日常、日常の幸せ、というのは少し違うのかなと思う。広島に原爆が投下されたこと、核の恐ろしさなどを皆さんに知っていただき、そこに言及した中での平和づくり、街づくりを伝えることが重要かなと思う。平和文化月間という話もあったが、ピースツーリズムで何か公開セミナーを実施してはどうか。テーマは考えなければならないが、これだけパネリストがそろっているので、移民の歴史など、広島の復興に

繋がったというような、伝承していける市民向けの公開セミナーがあったら良いと思う。

(瑠璃委員)

一つは前田委員がおっしゃったように、点として考えるのではなく、面として捉えるという点についてコメントしたい。これは原田座長がおっしゃっていたことだが、ルートを繋げていくということと、被爆遺跡と遺跡の回る途中で情報を追加することが必要である。例えば、ルートの途中で、どのようなお好み焼屋があるか、昭和の面影を残す町並みがどこにあるかなどの情報である。大芝委員がおっしゃったように片淵監督の映画「この世界の片隅に」のツアーを周りながら、昭和の町並みや軍都を体感し、カフェを巡ることができたらよいと思う。広島は軍都として発展したので、現在でも射撃練習をしていた長い道が残っている。そこで止まってみる、そして学んでみる。その途中で面白いカフェがあるので寄ってみる。このように現在と過去の両方を楽しみながら巡ってみる。そうしているうちに時間がかかるからもう一泊しようかということになればよいと願っている。実際に、滋賀大学デザイン科の学生6名が来た時に、ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会の方々と一緒にツアーを組んだところ、広島を全く知らなかったという学生が、広島を非常に楽しんで、一泊して帰って行った。来訪者として来た彼女たちが、若い世代の目線で、面として捉える広島のマップを卒論として作成しているという連絡があったので、出来上がったら、是非紹介したいと思う。そういった面では、新たに浮遊層を捕まえていくということを考えると、古谷委員が提案されたように、被服支廠にミュージアムが出来れば、歴史という面から訪れてみたいという、浮遊層の方が来るかもしれない。また、その辺りにゆっくりできるカフェができれば、若い人たちが集まるような、一つの大きな観光資源になると思う。これまで、平和記念公園を訪れた方々が、「ここが公園でよかった」「原爆であり多くの方が犠牲にならなかった」と考えてしまうことがあったが、実は旧中島地区には、諸説あるが4,000人以上の人が暮らしていた。訪問者にそれを五感で感じてもらえるように、東京大学の渡邊先生たちや、フィールドワーク実行委員会のみなさん、スティーブン・リーパーさん達が、本を出したり、VRで説明したり、ツアーやワークショップを企画したりしている。平和記念公園内に、前回の会議で村上委員がおっしゃったような、焼けた畳の跡が見えるような展示が出来れば、更に過去と現在を目の前に突き付けられて、ふらっと来た来訪者たちが深堀したくなるようになると思う。

もう一つ、ピースツーリズムの概念についてコメントしたい。平和の概念をどう捉えるかということだが、ピースツーリズムの文化を国連のSDGsに照らして考えれば、新たな発見もあると思う。例えば、広島の自然など環境・経済資源の保護(14&15)や、広島を離れてハワイに移民として行った時代の社会的背景(SDGs1)、万人のための教育で平和・公正を考える(SDGs4&16)など、広島の歴史・現在・平和・観光を繋げていくことが出来る。まとめると、様々な普遍的な平和を考えるそのきっかけとなる故郷が「広島」ということである。そういった意味で「平和を考える故郷」に「もう一度行ってみたい」「じっくり、ゆっくり見てみたい」という、新たなピースツーリズムの概念を作っていければと願っている。そのためにも、私たちは観光に強い北海道大学メディア・コミュニケーション研究院などと、あらたに平和観光の学会を立ち上げようとしている。是非委員の皆さまや、観光政策部の皆さまにご参画いただいて、シンポジウム等を含んだ新たなプロジェクトを立ち上げたいと考えている。

(渡部委員)

沢山の議論を聞かせていただき、全部なるほどと思った。

いくつもキーワードが出てきたように思う。「人間のレジリエンス」「平和を考える故郷」「歴史を伝承

する」「浮遊層を深堀層に向かわせる」など。深堀層というのが、単に反核だけではなく、深く広島や今の世界について考え、自分の視座を持つ人になっていくのだと思う。幅の広い、今おっしゃっていただいた色々な平和の概念でもって、皆さんが色々なことを考えていただく、平和を考える故郷になることを目標にして、これからピースツーリズムがどのようにやっていくのだろうか、というのが私の最後の発言である。

今まではモデルルートを設置するというところに注力してきたが、それが完成した後もこれだけの委員の方が集まっている。これは、経済観光局を超える話であり、まさにこれからの広島を考える大きなテーマである。私の一番の願いは、このピースツーリズム推進懇談会がさらにパワーアップして、横断的に市役所の中で意見交換をしたり、あるいは、実際の施策に落としこめるような力を持つようなことが大事ではないかと思う。そのためにどうすれば良いかということは、村上委員と末政委員の方で、もうお考えになっているのではないかと思うが、今、広島の街の大きなグラウンドデザイン、都市のアイデンティティを明確にするという議論がほとんどない。広島の街一つを見ても、歴史を伝承するためには、多層の広島の歴史が見えなくてはいけない。遺構が見えていくことが大事だと思う。遺構を見せていこうという、政治的な意思が感じられないことがすごく残念である。これからの広島を考えた時に、ピースツーリズムでは、そこに踏み込んだところで考えられるようパワーアップする必要があるのではないか。「ルートが出来た」「施策が出来たから終わる」では、私たちは本当の目的に到達出来ていないと感じる。最後にご提案だが、改めてピースツーリズムを通して、広島の街づくりを含めて考えるために、時間と人材を配置し、横断的な局を超えた仕組みを作る必要があるのではないか。

(末政委員)

前田委員からご指摘があった点についてコメントしたい。確かに、広島市内の滞在を強調したように感じられたかもしれない。例として宮島をあげたが、インバウンドでみると、広島は日帰りの地であって、広島に来て平和記念公園を訪れた後、すぐに大阪や福岡に行ってしまう。広島市内にも、食べ物、文化的な施設など、様々なコンテンツがあるので、そこを深堀していただいて、広島を満喫してもらいたいと考えている。

先ほど事務局から説明があった市民と共同で PR 動画をつくるということについては、まず広島を旅行先として選んでもらう、来てもらうということが重要だと思う。世界の若い人たちに来てもらうよう、世界にアピールして行ってほしい。

他にも多くの深いご意見を頂いたので、考えながら進めていきたいと思う。

(原田座長)

瑠璃委員、沢山のデータを分析して下さり、ありがとうございます。委員の皆さんからも色々なご意見を頂いたので、それをもとに今後の取組に反映させていただきたいと思っている。一つ一つの意見をかみしめながら、今後の在り方について考えていきたい。言うまでもないが、ピースツーリズムという言葉が出てきたこと、あるいはこういった懇談会ができたこと、まさにそれは被爆体験が原点にあるということなので、そのところから決して離れることなく、それを原点として、より発展的な事業展開に進めていければと思う。

本日はありがとうございました。